

2021 年度東京女子大学自己点検・評価及び外部評価を終えて

内部質保証の重要性が高まる中、本学では 2023 年度の認証評価受審を控え二年間をかけて準備を行っております。2021 年度は、内部質保証の方針・手続き、内部質保証体系図を策定するとともに、大学基準協会の 10 の基準に沿って、東京女子大学方針に基づいた到達目標の達成度を検証するため、全学的見地から自己点検・評価を行い、「2021 年度自己点検・評価報告書」を作成いたしました。

学内で実施した自己点検・評価については積極的に外部評価を行うこととしておりますため、2021 年度自己点検・評価報告書につきましても客観性、公平性を担保するべく、外部評価を実施いたしました。外部評価委員として、鈴木典比古先生、太田浩先生、飯泉紀子様にご協力いただき、書面審査を経て、2022 年 1 月 23 日にオンラインでの面談調査を行いました。頂いたご指摘、ご助言を受けて、今後の自己点検・評価活動や本学の内部質保証体制改善に努める所存でございます。

今回の自己点検・評価結果及び外部評価結果は、共に本学公式サイトに掲載いたしましたので、皆様にもご高覧いただければ幸いです。今後も、改善・改革に努め、教育・研究の質を高めるとともに、本学をお支えくださっている多くの方々に対して説明責任を果たしてまいります。

最後になりましたが、お忙しい中、大部にわたる報告書、関係資料をお読みいただき、面談調査、評価結果の執筆にご尽力くださいました外部評価委員の皆様には深く感謝申し上げます。

2022 年 3 月

東京女子大学 学長 茂里一紘
自己点検・評価委員長 大山淑之

2021 年度東京女子大学自己点検・評価に係る
外部評価結果報告書

2022 年 3 月

外部評価委員会

I. 外部評価委員名簿

いづみ のりこ
飯泉 紀子 (株) 日立ハイテク

おおた ひろし
太田 浩 一橋大学教授

すずき のりひこ
鈴木 典比古 国際基督教大学名誉教授

II. 面談調査日程

2022年1月23日(日) 14時 ～ 16時

於 東京女子大学

2022年 2月 11日

2021年度東京女子大学自己点検・評価に対する外部評価結果

外部評価委員 飯泉 紀子

【総 評】

2014年にグランドビジョンを制定し、2020年度からは5年間の中期計画をスタートさせ、目指す人物像の育成のための改革を着実に進めています。『知力（知識）を行動力にするリーディングウーマン』『専門性と幅広い教養をもった女性』『キャリアをカスタマイズする女性』という人物像は、年代を問わず目指す姿として共感されるものと思います。中期計画の達成に向けては、それぞれの計画における目標（指標）を設定し、現状とのギャップを客観的に把握する運用メカニズムと、より良くしたいというモチベーションが必要です。長引くコロナ禍という予測しえないリスクに対応しながら、新たな学びの方法を模索し教育の質を高めていくとともに、経営資源を効果的に活用して、リベラル・アーツ教育を持続させていかれることを期待します。

（優れている点）

- ・文理融合型のデータサイエンスのカリキュラムを副専攻として設け、社会で活用できるリベラル・アーツ教育を深化させています。
- ・これまでに巣立っていった卒業生を、学生にとって“身近なロールモデル”として活用しており、学生と卒業生の双方に継続的に刺激を与えています。

（努力課題）

- ・内部質保証制度により質向上を目指すには、“PDCAサイクルを回したか”という確認では不十分です。目標（マイルストーン）を設定し、ある時点における結果（進捗）を把握し、そのギャップを検証し次なるプランを立て関係者間で合意することが重要です。
- ・入学手続きのオンライン化、職員の勤怠管理システム導入、キャリアセンターでのチャットボット採用、若手職員を中心としたペーパーレス化WGなど、デジタル化と業務効率化に着手しています。“人”の時間をコア業務に使えるようにするために、さらなる設備・IT投資の計画と迅速な実行が求められるところです。

2022年 2月 17日

2021年度東京女子大学自己点検・評価に対する外部評価結果

外部評価委員 太田 浩

【総 評】

東京女子大学は、毎年、自己点検・評価を実施し、その客観性を高めるため、有識者による外部評価も行っている。これら3つの評価結果を改善につなげるPDCAサイクルを実行している。第2期認証評価（2016年）を受けた後、そこで指摘された改善点についても真摯に対応していると判断できる。

8項目からなる「東京女子大学グランドビジョン」で今後の大学としての方向性を明らかにするとともに、「大学として育成する人物像」を5項目で明示している。このビジョンに基づき、2018年には、現代教養学部を5学科12専攻に再編し、リベラル・アーツ教育をさらに充実させることで、実践的な学びを重視した教育を全学的に展開している。学生支援においても、さまざまな取組みを継続的に行っており、成果となって表れていることは高く評価できる。

10の基準について、それぞれに付随する評価の視点をもとに評価を行った結果、大学としてふさわしい水準にあり、東京女子大学の理念・目的の実現に向けた取り組みがなされていることを確認した。

今後も建学の精神への理解を深めつつ、大学の理念と目的を時代にあわせて進化させながら、貴学の使命を実現するため一層の改善、向上に努められるよう期待します。

（優れている点）

- グランドビジョンや育成する人物像をはじめとする東京女子大学の基本方針（理念・目的を含む）が、グローバル化が進む今日において、社会が求める大学の教育研究および育成すべき人物像にかなっていること
- 上記を実現するための努力が学科専攻の再編成、教育プログラムや附置センターの改善、そして不断の評価活動（TWCU アセスメントモデル等）を通して実践的に行われていること
- 学生の主体的な学びを促進するための環境整備に努め、各種教育プログラムを教育課程の内外で提供していること
- コロナ禍への対応で始まったITCを活用した教育を恒常的なものとするべく、新たな取り組み（Eポートフォリオを含む）に挑戦していること

(努力課題)

- 「データで見る TWCU」のような外部者向けのウェブサイト（大学に関する基本データが集約されたウェブサイト）がほしい。また、国際教育・学生交流に関するデータについては、学生向けに分かりやすく示した方がよい。例えば、留学に伴う単位互換（認定）の実績を示すべき。
- 文科省も勧めている休学留学における単位認定（互換）を実施した方がよい。
- 海外研修・留学の学習成果分析にあたり、IDI, BEVI-J, 行動特性診断テストのようなツールを用いることにより、客観性の高い比較分析を行ってほしい。特に非認知能力に関する成果分析が今後重要になってくる。
- 成績評価について、S と A の合計を全履修者数の 50%にするというのは世界的な基準からすると再考を要するのではないか。
- ダブル・ディグリーと副専攻をエンプロイアビリティの向上につなげ、それにより参加学生は増やすためには、まず企業（雇用者）にその価値を理解してもらう必要がある。そのためには成果の可視化と対外的広報が求められる。
- 大学院の定員確保（充足）については、留学生のリクルーティングが現実的な対策として国内の大学間で広がっているのが、貴学でも検討すべきであろう（質の高い留学生をどう確保するかという方策が重要）。あるいは、大学院生の定員を見直し、米国のリベラルアーツ・カレッジのように、学士課程に特化することも選択肢として検討すべきではないか（限られた資源の有効という点からも検討に値する）。

(助言)

- 質保証の仕組みはすでに出来上がっているため、今後は評価活動の形骸化を防ぎ、評価結果を次のプランニングにどう生かすかが課題となるであろう。プランニングのときから目標を明確化し、成果（アウトカム）をどう評価するか考え、評価指標を設定することを勧めたい（目標と評価指標は裏表の関係にある）。テストスコアなどをもとにした量的な学習成果分析はスタンダードかつ分かりやすいが、質的な分析も重要。ただし、質的な評価は難しいだけでなく、コストもかかる。

2022年 3月 4日

2021年度東京女子大学自己点検・評価に対する外部評価結果

外部評価委員 鈴木 典比古

【総 評】

貴学はキリスト教主義に立脚したリベラル・アーツ教育による女性の人格形成教育に 100 余年にわたって邁進され、女性の「専門性をもつ教養人」としての大学教育において日本の高等教育に大きな足跡と役割を果たしてきた。

さらに、今後、21 世紀における人類・社会に貢献する女性教育のために「東京女子大学グランドビジョン」を制定し、学科専攻の再編によりリベラル・アーツの中心的目的である Arts（創造性）& Sciences(科学)の統合を目指し、またそれを実践している。

また、教員の FD に学生が参加するなど、開かれた大学を確立し、同時に学生の自覚と責任の陶冶に努めている。

行政面としては、理事会・教授会合同作業部会を設置して、重要事項の方針を協議することや、また学長の選任に際しては、学長候補選考委員会が選考した学長候補について教職員による選挙を行い、理事会はそれを参考にして学長を決定するなど、学内民主主義を確立している。

（優れている点）

- *キリスト教の立場に立脚し、確固とした教育原則を堅持し、実践している。
- *リベラル・アーツ教育の基本として文理融合のカリキュラムを提供している。
- *日本国内のみならず、世界の中で個を確立した女性の生き方・考え方を真摯に追及している。
- *女性教員の比率が約半数に及び教員ジェンダー間の差がない。

（努力課題）

- *国からの財政支援が減少していく中で、財政基盤の強化・確立が必要。
- *変化の多いと予測される 21 世紀における女性の生き方を考察し、それに対応・先駆する女性教育の在り方を継続的に確認して進むことが肝要である。
- *日本における女性教育のモデル校となっていることを絶えず自覚して改革・前進する事を望む。